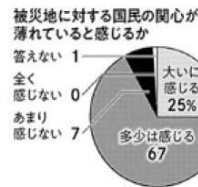


# 東日本大震災10年 風化に危機感 広がる



被災地への国民の関心が薄れていると感じる割合は、地域や男女、年代の別で見ても、全ての層で9割台となった。「風化」が進んでいるとの認識は広がっており、危機感もうかがえる。

震災を風化させないために必要な取り組みを10項目の中からいくつでも選んでもらうと、「学校など教育現場で子どもに伝える」が70%で最も多く、「新聞やテレビなどが被災地の現状

読売新聞社が行った「東日本大震災10年」に関する全国世論調査※では、「風化」を感じている人が9割を超えた。震災が話題に上ることが減っているなどと、危機感を訴える意見もあった。震災の教訓を継承していけるかどうかの分岐点にあるといえそうだ。

「学校で教えて」70%

今後、被災地に何らかの形で支援したいと思う人は

をもっと伝える」と「震災の被害や復興の記録を残す」の各59%、「普段から家族で震災のことを話し合う」の34%などが続いた。

震災について感じていることを自由に書いてもらった回答でも、「被災地のユースが少なくなっている」（東京都、50歳代女性）などの指摘が目立った。高校の修学旅行で被災地を訪れた佐賀県の20歳代女性は、「報道だけでは伝わらない被災者の苦しみや被災地の現状を知った。子どもたちに伝え、災害への危機感や対応策について考えてもらいたい」との声を寄せた。



震災の被害を伝えるパネル展（徳島県北島町で）

8割を超えた。地域別では、北海道・東北で87%、関東で83%と中部以西の地域より高かった。年代別で

は、全ての年代で8割前後と大きな差はなかった。この10年間で被災地にどのような支援をしたか、複数の回答で聞くと、「被災地の物産品を買った」44%、「被災した自治体に寄付をした（ふるさと納税を除く）」16%などの順だった。年代別でも、「物産品を買った」は全ての年代でトップを占めた。「とくに

※世論調査は報道機関や官公庁が、国民の意識や考え（世論）を知り、分析するために行う調査

ない」は全体の31%で、若年層の18〜39歳に限ると40%に上った。地域別では、近畿、中国・四国、九州の3地域で「とくにない」が約4割で、被災地からの距離も影響していることがみとれる。

- 1 記事が説明する「風化」とはどのような状況を指していますか。□にあてはまる2文字を記事中から抜き出しましょう。

東日本大震災に対する **関心** が薄れていること

- 2 次の割合について、「地域で差が出たもの」にはア、「年代で差が出たもの」にはイ、「地域と年代の両方で差が出たもの」はウ、「差が出なかったもの」にはエを書きましょう。

- ( **エ** ) 「風化」を感じている割合  
( **ア** ) 被災地に支援をしたいと思う割合  
( **ウ** ) 被災地に支援をしなかった割合

「風化」は、地域や男女、年代別で見ても、全ての層で9割台とあります。

「支援をしたい」は被災地に近いところの方が、中部以西の地域より高かったようです。

「支援をしなかった」は、一番ムズカシイです。支援したことが「とくにない」という人たちが、どのような結果だったか、探してみましょう。

「震災から学んだこと」は多くあります。忘れずに、次に生かすには、若い人に伝える工夫が必要ですね。

- 3 世論調査は結果を分析して、課題を浮きぼりにし、問題意識を持ってもらうのも目的のひとつです。今回の調査結果や記事から読み取れることとして、最も適切なものを選び、番号を書きましょう。

③

- ① 大きな災害であっても、次第に風化していくことは仕方がないということ。  
② 被災地でつくられた特産品を買うのに、不安を感じる人がいるということ。  
③ 教訓を語り継ぐために、子どもや若い世代への働きかけが大切だということ。  
④ 被災地から遠い地域の人には、防災への意識が弱まってしまっているということ。

読んでみよう！

## ◆ミー太郎のおすすめ記事

なとり  
名取

宮城県名取市の沿岸部にある閑上地区で津波にのまれ、14歳の中学2年生だった長女を亡くした佐々木清和さん(54)も、語り部活動が続けている。各地の中学校に出向き、娘と同じ年頃の生徒に、「命を大切にしてほしい」と伝えている。しばらくは中学生を見かけるのもつらかったという佐々木さんの10年を紹介する。

## 娘失った父から 三つのお願い

佐々木さんは震災発生時、閑上中学校2年の和海さんと妻、妻の両親と暮らしていた。自衛官の佐々木さんは、家族の安否がわからないまま救援活動に奔走。和海さんと再会したのは、震災から10日後の遺体安置所だった。

後に聞いたところでは、津波が押し寄せる前、自宅の片付けをしていたという。妻もその両親もその後、遺体で見つかった。

帰宅しても「おかえり」の声が聞こえない。一人きりの静かな部屋で、酒浸りになった。閑上中に通う子を亡くした遺族の集まりに顔を出すようになって、周りが話しかけづらい雰囲気をもっていた。

翌年、阪神大震災の記憶を伝えるヒマワリ「はるかのひまわり」を知り、種を取り寄せた。太陽に向かって伸びていくヒマワリに「天国から見えるかも」と思え、家族の死を受け入れられた。ヒマワリをかわいがるうちに、酒の量は減っていった。



津波で家族4人を失い、語り部活動をする  
佐々木清和さん

## 「幸せとは」考えて

「あなたにとって、幸せってなんですか」。佐々木さんは中学生にこう問いかける。

毎朝「きょう何食べたい」と聞いてきた妻。携帯電話をほしがると和海さんに、冗談半分に「中学4年生になったらね」と言った思い出。佐々木さんにとって、平凡な毎日こそが幸せだった。

そして、こうした貴重な日々を守るためにも、三つのお願いをする。

- 災害が起きたら、安全な場所に避難する
- 自分を含めてすべての命を大切にする
- 一日一日を大切にする

「この三つがみなさんの人生に役立てばうれしい。できれば、家族にも伝えてください」。そう締めくくる。



「あなたにとって、幸せってなんですか」

という問いかけに、どのように答えますか。

(2021年3月12日 読売中高生新聞より)

©2013 そにしけんじ／読売新聞社



## 学習指導要領との対応表

読むこと		構造と内容の把握	精査・解釈		
		ア	イ	ウ	エ
設 問	1	○			
	2		○		
	3				○